

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：25407

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14101

研究課題名（和文）子ども理解のメンタルモデルに基づく実践知獲得・共有のためのツールの開発

研究課題名（英文）Development of tools for acquiring and sharing early childhood education teachers' practice knowledge based on a mental model of child understanding

研究代表者

上山 瑠津子 (Ueyama, Rutsuko)

福山市立大学・教育学部・准教授

研究者番号：10804445

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、保育者の実践知である子ども理解の構造を明らかにし、その構造をもとに保育実践ツールを開発、検証を行うことを目的として、2つの調査を行った。調査1では33名の保育士・幼稚園教諭を対象に場面想定法を用いた面接調査を行った。その結果、保育者の知識や信念を含む子ども理解の視点が相互に関連する構造モデルが生成された。調査2では、幼稚園教諭4名を対象に、調査1の結果と認知カウンセリングの手法を援用した個別面接を行った結果、子ども理解の深化が確認され、省察や子どもへの関わりの向上に一定の有効性があることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義としては、子ども理解をメンタルモデルとして捉え、「子ども情報の吟味」、「年齢に応じた発達段階」、「園生活を通じた成長期待」と下位概念の関連を含む子ども理解の全体構造を仮説モデルとして示した点である。さらに、生成されたモデルを活用した保育実践の開発と検証を通して、保育実践の向上に一定の有効性が示されたことは、複雑化・多忙化する保育実践における実践知の獲得と継承に対して具体的な支援方法を提案できた点で意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the structure of child understanding, which is the practical knowledge of early childhood teachers, and to develop and test tools for childcare practice based on this knowledge. In Study 1, 33 nursery school teachers and kindergarten teachers were interviewed using the hypothetical vignettes. As a result, a structural model was developed from the perspective of interrelated child understanding, including the knowledge and beliefs of the teachers. In Study 2, four kindergarten teachers were interviewed individually using the results of Study 1 and the cognitive counseling method. The results confirmed a deeper understanding of children and suggested that the interviews had a certain effect on improving reflection on and involvement with children.

研究分野：保育学，発達心理学

キーワード：保育者 子ども理解 省察 行動特性 可視化 メンタルモデル

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

現在わが国では保育士不足が深刻化している。厚生労働省(2017)によれば、年間およそ3万3千人もの保育士が職場を去っている。中でも早期離職者が多く、小学校以降の教員の平均離職年齢が50代であるのに対して、保育幼児教育施設では30代という若さである。このような現状において、保育者は多様な保育経験をもつ同僚保育者と学び合い、またベテラン保育者の技やコツを受け継ぎながら実践知を獲得していくことが困難となっている。この課題の解決には、保育者の実践知が保育の知識技術や保育観などを含むという特質を踏まえ、実践知の構造を可視化し、保育者相互の実践知をつなぐ手立てが必要である。

### 2. 研究の目的

保育者にとって最も重要な実践知のひとつは、保育実践の基盤とされる子ども理解である(小田・中坪, 2009; 砂上, 2016)。従来の子ども理解に関する研究では、目の前の子どもの姿から保育者がこれまでに蓄積した知識が想起され、比較、推測、解釈することで子ども理解が進む過程(岡田, 2005; 2014)や保育者が子どもの姿や行動から何を捉えるのかといった子ども理解の視点(佐藤・相良, 2014; 2017)が明らかにされてきた。しかし、保育者の意図や信念を含めた視点や視点間の関連を含めた子ども理解の全体構造は明らかにされていない。子ども理解の過程や視点がそれぞれの方法で個々に検討されてきたため、実践知としての子ども理解を体系的に捉えにくい現状にあった。

教師・指導者研究では、実践知の獲得と継承の課題に対して、専門家特有の実践知を、経験や知識、信念から作り上げられた認識枠組みであるメンタルモデルとして捉え、指導行動を構造的に可視化することで、個人の中で獲得される実践知を客観的に示し、他者との共有に取り組んでいる(北村・永山・齋藤, 2007; Moveorach & Strauss, 2012)。保育者の子ども理解も専門家特有の認識枠組みであり、メンタルモデルとして捉えることは実践知の可視化と実践の改善に有効であるといえる。

以上を踏まえ、保育者の実践知の獲得と共有の促進を図る実践支援プログラムの構築を目指し、保育者の意図や信念を含む子ども理解の構造を明らかにした上で、保育実践支援ツールの開発・検証を行うことを目的とする。具体的には次の2つの調査を通して実証的に検討する。調査1として、子ども理解の構造を明らかにし、保育実践との関連を検討することである。調査2として、子ども理解の構造をもとに、実践知の可視化を行う保育実践支援ツールを開発し、その有効性を検証する。

本研究において暗黙的な特質をもつ保育者の子ども理解の構造を可視化し、保育実践ツールを開発することは、保育者自身の子ども理解の偏りやつまずきへの気づきが促され、保育者相互の実践知を共有する知見を提供する点で意義がある。

### 3. 研究の方法

**調査1** 研究対象者は、3歳以上のクラス担任または副担任の経験がある保育者33名。高濱(2000)の保育経験年数群(2-4年群, 5-10年群, 11年以上群)を参照し、各群10名程度を選定した。園種別は、私立保育所2園(17名)、国立大附属幼稚園2園(8名)、公立幼稚園1園(6名)、私立幼稚園1園(2名)、保育経験年数は、2年から34年(全体M=11.03, SD=8.86; 幼稚園M=11.24, SD=8.17; 保育所M=10.81, SD=9.27)、性別は、女性31名、男性2名であった。調査内容と手続きは、乱暴な男児と内気な女児の事例(杉村・桐山, 1991)を用いた場面想定法を実施した。また面接終了後、保育実践力尺度(木村・橋川, 2008)の23項目について、4件法で回答を求めた。仮想場面に対して(a)場面に対する対応、(b)対応の理由について尋ねる半構造化面接を個別に行った。(b)の発言を分析対象とし、修正版グラウンデッド・セオリアプローチ(M-GTA)(木下, 2003)を用いて分析した。

**調査2** 研究対象者は、3歳以上のクラス担任で保育経験5年以内の幼稚園教諭4名(女性4名、保育経験2年目2名、3年目2名)。クラスの中で気になる幼児を1名選定してもらい、対象児への理解や対応について尋ね、語りの内容を付箋紙に書き出す作業を含む個別面接を月1回程度計5回実施。子ども理解を可視化する支援方法として認知カウンセリングを援用し、表1の手順で実施した。子ども理解の変化の測定と支援方法の有効性を検証するために、各回で指導方法尺度23項目(杉村・桐山, 1991)、初回と最終回で省察尺度36項目(杉村・朴・若林, 2009)と多次元保育者効力感尺度25項目(西山, 2006)への回答を求めた。

表1 面接手続き

手続き段階	質問および指示
1 自己診断	保育の中で、ちゃんには、どのようなことが課題となっていますか？または、〇〇先生は、ちゃんへの理解や援助についてどのようなことが課題となっていますか？
2 仮想的指示	ちゃんのことを知らない先生に説明するつもりで、特徴や普段の様子などをお話してください。
3-1	はじめに、ちゃんの特徴や日常の保育の中で、ちゃんに対して考えていることなどを色付き付箋に書き出してください。援助や関わりについては、白い付箋に書いてください。(書き出し終わったら)それでは、付箋の内容について説明をお願いします。次に、色付き付箋に書かれた内容をカテゴリーをもとに整理していきます。(ここで各カテゴリーの説明をする)それでは、3つの大カテゴリーと3つのサブカテゴリー(「子ども情報の吟味(外面情報、内面情報、背景情報)」「園生活を通じた成長期待」「年齢に応じた発達段階」)に分けてください。追加内容があれば、付箋紙に書き出してください。(追加があれば、説明を求めます。)
3-2	最後に、付箋の内容を見ていただき、つなげて考えていると思う付箋について、線を引いてください。
3-3	作成された図をご覧になった印象や感想をお答えください。
4 診断的質問	これまでの流れを一緒に行ってみて、ちゃんに対して違った見方ができたり、気づいたりしたことはありますか？また、これまでの〇〇先生自身の見方や理解の仕方、関わり方について、何が気づいたことや考えたことはありますか？
5 教訓帰納	

いずれの研究も所属機関の倫理審査を受け、承認を得て実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 子ども理解の構造の検討および保育実践との関連

保育者の子ども理解の構造については、事例別の概念では、乱暴な幼児では15、内気な幼児では12が生成され、事例に共通した3つのカテゴリー「子ども情報の吟味」「年齢に応じた発達段階」「園生活を通じた成長期待」が生成された。仮説モデルから、保育者の子ども理解は、行動特徴や内面、背景など主観的な捉えに基づく「子ども情報の吟味」を軸に展開される。そして主観的に捉えた子どもの姿を「年齢に応じた発達段階」と比較・照合することで、相対的視点を踏まえたより適切な理解につなげていき、合わせて、子どもに応じて経験してほしい「園生活を通じた成長期待」を意識することで今後の具体的な対応を視野に入れた理解へと方向付けられていく構造が示された(図1参照)。以上の子ども理解の3カテゴリーを用いて数量的に実践力との相関分析を行った結果、乱暴な幼児では、「子ども情報の吟味(背景)」と「子ども理解に基づく関わり力」「環境構成力」(順に、 $r = .48, p < .01$ ;  $r = .57, p < .01$ )に中程度の正の相関が、「年齢に応じた発達段階」と「子ども理解に基づく関わり力」に中程度の正の相関( $r = .44, p < .05$ )があった。乱暴な行動の背景にある他者との関係性を理解していくことで、子どもの気持ちを励ましたり、葛藤経験を支えたりする関わりや、遊びや空間の環境構成につながっていくと考えられる。一方、内気な幼児では、「子ども情報の吟味(内面)」と「子ども理解に基づく関わり力」に中程度の正の相関( $r = .40, p < .05$ )があった。この結果から、内気な幼児の場合、内面に対する理解と「子ども理解に基づく関わり力」の関連が示された。保育者や他児との関わりが少ない幼児に対しては、仲間入りへの困り感や不安の状態を探ったり、遊びに集中しているかを見極めることで、遊びの姿を励ましたり、やる気を高めるような具体的な関わりにつながっていくと考えられる。

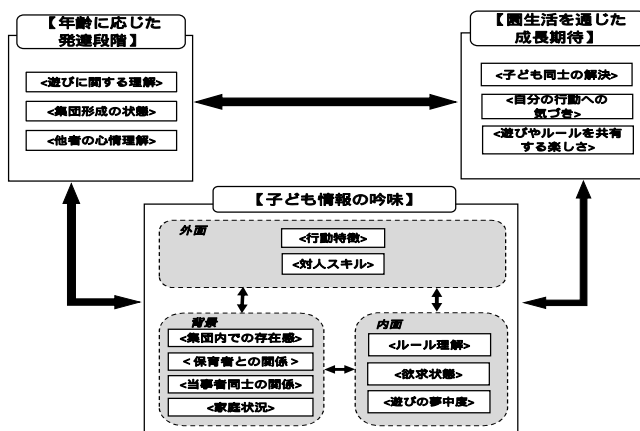


図1 乱暴な幼児の子ども理解の結果図

##### (2) 子ども理解を可視化する実践支援の検証

個別面接では、認知カウンセリングの手法を援用した実践支援を行い、その有効性を3つの観点から検討した。第1に、対象児への理解について、「図式的説明」段階で作成された付箋図を分析対象として、カテゴリーごとに計数し量的に変化を捉えた。その結果、ベースラインより1回目以降の言及数が全参加者で増加しており、子ども理解を可視化する実践支援は、特に3回目までは視点の増加に有効であることが示された。

第2に、実践支援の作用について、「診断的質問」「教訓帰納」の発話を中心に、定性的コーディングによる分析を行った。その結果、保育者自身の理解への作用では、13のオープンコードと5つの焦点的コードが生成された。付箋図を量的に把握したことで【対象児認識度への気づき】【理解の偏りへの気づき】【関わりや保育への気づき】につながり、付箋図の状態について質的な把握をしたことで【視点の状態への気づき】につながることが示された。さらに量的、質的な把握は【捉え方の気づき】といった保育者自身の理解の傾向や特徴へのメタ的な気づきにつながることが示された。また、子ども理解の枠組みの活用では、表2の通り、8つのオープンコードと3つの焦点的コードが生成され、保育全体における子ども理解や記録に活用されることが示された。

第3に、実践支援の有効性では、省察尺度、指導方法尺度、保育者効力感尺度を用い、初回と最終回の各尺度の得点を確認した。その結果、個人差があるものの、1回目より5回目でおおむね得点は高くなっており、本研究の実践支援は、省察や子どもへの関わりへの向上に一定の有効性があることが示唆された。

表2 子ども理解の枠組み活用に関するコード

焦点的コード	オープンコード	具体的な記述	該当者
他児理解への活用	他児への成長期待	他の子にもこうなってほしいなとか、3月までにこうなってほしいね、何月なるまでにはこうなってほしいという思いが出てきたりした。	B教諭
	他児との比較	1ちゃんだけでなく、この行動でもししたら引かかるのかなとか他の子と比べてりとか思えることはある。 (年齢に応じた発達段階)とかは最近気にします。隣のクラスとも比べたり、文字、数とかでミックスでやるから私が向こうのクラスとこっちのクラスを見たりする。	B教諭 C教諭
保育展開への活用	保育の試行	その子の様子見たりすること自分の中で増えてきたなと思う。結構(子どもの姿が)見えてきたりするから、これちょっと難しいんだなと思って、じゃあ明日こうしてみようかなとか。そういうのがぼんやりと出たりとかして。	A教諭
	予想に基づく関わり	聞き取り終わった次の日からは、課題とか成長期待とか書いたことをちょっとやってみようとかは思ったり意識したりする。 (年齢に応じた発達段階)のところ、普通の子はこうよなって思っところ、1ちゃんはどうするんたろうと思う。数字に向けて、このくらいやったらこのくらいができるだろうと予想する。予想して子どもたちに接することが多くなった。	C教諭
記録への活用	視点の利用	要録とか書類とかも、そういう視点で書くようになってきた。	A教諭
	成長期待視点の利用	1つ1つのエピソードを自分の中でこうだったんじゃないかになって視点で考えたり、書いたりすることは増えたと感じる。	D教諭
	焦点化	最近自分が改善を書くときに、自分の願いを書いているなと思います。こういうことがあって、こうなってほしいなということを書いたりする。	C教諭
	具体化	エピソード記録も始まったので、結構焦点絞ってから書いたりする。	A教諭
		具体的なことを書こうかっていう日も増えた。	D教諭

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 上山瑠津子・杉村伸一郎	4. 巻 59
2. 論文標題 保育における子ども理解を可視化する実践支援	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 287-298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上山瑠津子	4. 巻 10
2. 論文標題 実習経験を通じた保育学生の子どもへの対応と理解の変容－テキストマイニングによる分析－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上山瑠津子・杉村伸一郎	4. 巻 19
2. 論文標題 保育における子ども理解のメンタルモデル	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 質的心理学研究	6. 最初と最後の頁 175-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 上山瑠津子
2. 発表標題 乳児の保育所入園を通じた母親の心理的変容
3. 学会等名 日本質的心理学学会第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上山瑠津子・杉村伸一郎
2. 発表標題 子ども理解の可視化が保育実践に及ぼす効果の検討
3. 学会等名 日本保育学会大第73回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上山瑠津子・杉村伸一郎
2. 発表標題 保育における子ども理解支援の試み 認知カウンセリングを援用して
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上山瑠津子
2. 発表標題 保育における子ども理解のメンタルモデル
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会自主シンポジウム「保育者の専門性としての「子ども理解」を考える」(企画・話題提供)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上山瑠津子
2. 発表標題 ルールのある遊びの指導計画段階における保育者の実践知
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上山瑠津子 ・ 杉村伸一郎
2. 発表標題 子どもの特性に応じた保育者の子ども理解と援助
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Rutsuko Ueyama & Shinichiro Sugimura
2. 発表標題 Japanese Kindergarten and Nursery School Teachers' Understanding and Support Strategies for Children's Aggressive and Shy Behaviors
3. 学会等名 International Association of Early Childhood Education Conference 44th in Bangkok, Thailand
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 上山瑠津子 ・ 津川典子
2. 発表標題 保育カリキュラム研修を通じた保育士の学びと変化 A公立保育所の取り組みから
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第33回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 上山瑠津子 (編著 谷口 篤・豊田 弘司)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 242
3. 書名 実践につながる教育心理学 ( 5 章 社会性の発達 pp63-76. )	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------